

Story A

「またいつか」私たちはあの時、そうお互いに約束をし別れを告げた。
あの日の別れからもう3年が過ぎていた...
そんな3年の月日が過ぎた今、私たちは夢を叶えて再会を果たした。

第一章

女優を夢見るありとそれを応援する写真サークルのゆうき、私たちは家族ぐるみで仲が良くこの海が見える田舎町で育った大親友だ。

そんな私たちもう大学4年生、そろそろこれから先の進路を決めないといけない。ある日、学校の帰り道でこれからの進路の話になった。

ゆうき「ねえ、あり、私たちもう大学4年だしこれからの事とか決めなきゃだけど進路とか決まってるの?」

あり「うーん、一応決まってるは決まってるかな~笑」

ゆうき「え、何それ、私にも教えてよ!笑」

私たちはいつもの場所(海が見渡せる堤防)で進路について話した。

ゆうき「それで一、一応決まってるってどうするつもりなの?」

あり「私ね、小さい頃からの夢を叶えたいんだよね。」

ゆうき「え、それってもしかして...」

あり「うん、女優になるっていう夢を叶えてみようと思うの、だから私ね大学卒業したら東京に出ようと思ってるんだ。」

ゆうき「そうなんだね。いいじゃん!!私その夢応援するよ!!」

あり「ありがとう!そういうゆうきは進路決まってないの?」

ゆうき「え、私?私はまだ何も決まってないよ~笑」

あり「そっか...何かあったら言ってね、私、ゆうきの夢応援するから!」

ゆうき「うん、ありがとう!」

沈黙...(海の波の音)

ゆうき「そろそろ帰ろっか...」

あり「そだね、帰ろう。」

ゆうき「また明日、学校でね。」

あり「うん、学校で。」

お互いに帰路に着く。その帰り道ゆうきは寂しさのあまり泣いてしまう。

ゆうき「私たちこれからもずっと一緒だと思ってたのに...」

次の日

あり「あ!ゆうき、おはよう!」

ゆうき「おはよう(そっけない)」

あり「?」

私はありの顔を見るとなんだか泣いてしまいそうになっていた。そのせいでありと話せなくなって距離を置くようになっていたのだ。

それからというもの

あり「ゆうき!お昼一緒に食べよう!」

ゆうき「ごめん、ちょっと用事あるから...」

あり「そっか...ごめん。」
ゆうきは立ち去る。
あり「ゆうきー!今日一緒に帰ろうよ!」
ゆうき「ごめん、今日サークルあるから。」
あり「.....」
ゆうきはそのまま走り去っていく。
そんな私たちは段々疎遠になっていってしまった。

時はあっという間にたち
私たちは後数日で卒業の日を迎えようとしていた。
そして、ありの東京への出発の日も...
卒業の数日前の出来事。
あり「ねえ、お母さん、これゆうきに渡して欲しい」
手紙を渡す。
あり母「あんたこれくらい自分で渡しなよ」
あり「お願いだから渡しておいて!」
母に強く言い放つ。
あり母「わかったわよ...」
あり「強く言い過ぎた、ごめん...」
ありは自分の部屋に戻ってしまう。
いつもの場所(海が見える堤防)にて
ゆうき「後数日したら学校も卒業か、このままでいいのかな」
とあるスタジオの内定通知を片手にぼーっと海を眺める。
ありもゆうきもお互いの今の関係をどうにかしたいそう思っていた。
だがお互い不器用で上手く言えずにいたのだった。

～卒業式当日～

私は卒業式になってもありとまともに話せていなかった。そんな最中のことだった。
ゆうき「はあ、今日で卒業か...笑って卒業するって思ってたのにな...」
あり「ゆうき、卒業おめでとう。」
ゆうき「あ、うん、ありがとう。ありこそおめでとう。」
あり「うん、ありがとう。あのね、今日はゆうきに言いたいことあってきたんだ。私明日には東京に行くから、最後に伝えたくて...いつもありがとう元気でね。」
ゆうき「え...」
ありはその言葉だけを残して行ってしまった。

次の日(ありが東京に出発する日)

時間は刻一刻と迫っていた。
ゆうき「あり、今日で東京に行っちゃうのか...ほんとにこれでいいのかな...」
ゆうき母「ねえ、ゆうきー、今日ありちゃんのお母さんから手紙もらったんだけど。」
ゆうき「え、手紙?」

ゆうき母「うん、ありちゃんからじゃないの?何があったのかは知らないけど、あんたも意地張ってないで見送りくらい行ってきなさいよ。」

ゆうきは手紙を読む。

以下手紙の内容

ゆうきへ

こんな形になってごめんね。ゆうきが私の夢を誰よりも一番に応援してくれてるの知ってた。私はその優しさに甘えてゆうきの気持ちに気づいてあげれなかった。私、親友失格だね。ごめんね。東京に行く前にゆうきの本当の気持ちを知りたくて、卒業式の時に聞こうと思ったんだけど、いざ目のまえにすると見えなくてあんな風な言い方しか出来なかった。本当はちゃんとゆうきと話してスッキリした気持ちで東京に行きたかったんだ。

ゆうきが私を避けてたのも私の夢のせいだよ。私だって小さい頃に似た約束ぐらい覚えてるよ。ゆうきも自分に正直に生きてほしい、私なんかの応援じゃなくてゆうきの本当にやりたいことをこれからやってほしい。私だってゆうきの応援がしたい。

ありより

ゆうきは走り出していた。手紙を読み終えゆうきは自然と身体が動いていたのだった。

ゆうき「あり…こんなに私のこと思ってくれてたなんて…私のバカ、ありの気持ちに気づいていなかったのは私の方だ…ごめん。」

ゆうき「ありにちゃんと謝らなきゃ、私の想いも伝えたい。」

ゆうきは必死になって走った。ありにちゃんと想いを伝えるために。

その頃駅では着々と出発の時間が迫っていた。

あり「みんな今日は来てくれてありがとうね。」

友達A「ううん、そりゃ来るよ!これから女優として頑張っていくありの為だもん!」

友達B「うんうん!そうだよ!私達にも応援させてね!!」

友達C「無理せず、体調には気をつけて頑張ってるね!」

あり「みんな、ありがとう。」

ここでありが涙ぐむ。

あり母「あり、自分が決めた夢なんだからへこたれずちゃんとやり通して頑張りなさい。でも何か辛くて周りの誰にも頼れなかったらいつでも言いなさいね。お母さんはありの1番の味方だから。」

あり「お母さん、うん、ありがとう。私頑張ってくるね!」

あり「そういえば、ゆうきは来てないの?」

友達A「うん、ちゃんと来るように伝えただけだね…。」

あり「そっか、そうだよ。はあ…あっという間だったな…」

東京行きの電車が到着しありが乗車しようとしたその時

ゆうき「ちょっと待って!」

友達みんな「ゆうき!?!」

あり「ゆうき…」

ゆうき「あり、ごめんね。私、ありの気持ちに気付いておきながら知らないフリしてた、ありとずっと居たくて、最低なことしてたごめん。」

あり「……。」

ゆうき「手紙読んだよ、ありの気持ち綴ってくれてありがとう。ありのおかげでやっと気づく事ができた。私もやりたい事見つけたよ。」

電車が走り出す。それと同時にゆうきも走り出す。

ゆうき「私カメラマンになるから、カメラマンになっていつかありの事撮るから！絶対にこの夢叶えてみせるから約束！」

ありは涙しながら頷く。

あり「うん、約束だからね」

電車が走り去っていき、ゆうきはホームの端まで走っていった。

ありとゆうきは最後にお互いの想いを伝え仲直りする事ができ前に進む事ができた。

それから大学を卒業してから数ヶ月が経った。

ありは国民的女優を目指し舞台やモデル活動、演技など日々精進していた。

ゆうきは卒業後、スタジオカメラマンになって働いていた。

お互い、それぞれの夢を応援しながら自分の夢を叶えようと頑張っていた。

それから数年の月日が経ち、ゆうきが働いているスタジオに一通の撮影依頼が届いた。

第二章

ゆうきの働くスタジオに一通の撮影依頼がきた。

その内容は国民的女優になったありの宣材写真の撮影依頼だった。

～撮影当日～

とうとうこの日が来てしまった。

ゆうきは泣いても笑っても今日の撮影に全てを注ぐ決めていた。今まで撮影してきた中で一番いいものを…

ゆうき「ついに、この日が来たのか…ありのことを撮る日が来るなんて…」

そんな事を思いながら朝の支度をしてスタジオに向かった。

あり「いよいよ今日か…ゆうきに撮ってもらうのいつぶりだろう、なんだか久しぶりだな。」

ありはちょっぴり緊張しながらも楽しみにしていた。

ゆうき「社長、おはようございます」

社長「おはよう、今日はよろしく頼むよ！」

ゆうき「はい！」

ゆうきは撮影の準備を始める。白ホリスタジオやストロボ、その他様々な機材を準備した。

どんなことにも対応出来るように昨日の夜考えていたのだった。

ゆうき「よし！これで大丈夫！準備万端！」

ここでクライアントの大手事務所の方々が入りし始めた。

事務所社長「おお！久しぶりだなー！元気にしてたか！」

社長「もちろん元気だよ！いつも急に依頼するところは変わってないな笑」

事務所社長「まあまあいいじゃないか笑」

そんなたわいない会話を社長達はしていた。

ゆうき「ほんとに、仲良いんだなあ」

そう、ふと社長達の会話を横目にゆうきは撮影の準備を進めていた。

社長「ゆうきくん、ちょっとこちきてくれるかな？」
ゆうき「わかりました、今行きます。」
社長「紹介するよ、今日カメラマンを担当するゆうきくんだ。」
ゆうき「本日はよろしくお願ひ致します」
事務所社長「君がゆうきさんか！うちのありから話は聞ひてるよ！今日はよろしくね！」
ゆうき「は、はい！よろしくお願ひします！」
挨拶は終わひりまた社長達は話に花を咲かせて盛り上がっていた。
あり「ゆうきー！おはよう！やっこの日がきたね！」
ゆうき「おはよう！そうだね、なんだか緊張するけど頑張るよ！」
あり「だよね、私も緊張してる。私も頑張るから！笑」
そんな話をしながらありとゆうきは挨拶を済ませた。
あり「それじゃ私、これからメイクあるからいくね！」
ゆうき「うん、わかった！また後でね。」
ありはメイクに向かいゆうきは撮影の最終調整に入った。

全ての準備が終わり撮影がスタートした。
ゆうき「それでは本日よりよろしくお願ひします！」
あり「お願ひします！」
ゆうき「本日、カメラマンを担当させていただくゆうきです。」
あり「あります！お願ひします！」
お互いを知りつつも形式上の挨拶を済ませた。
ゆうき「早速、撮影に入っていきたいと思ひます！」
あり「はい！」
ゆうき「どんなイメージとか好きな角度とかありますか？」
あり「大人っぽいイメージで華がある感じでお願ひしたいです！角度はお任せします！」
ゆうき「わかりました！それでは撮っていきますね！」
そんな会話を挟みつつゆうきはどんなイメージで撮るかを脳内で構築していった。
手始めに何枚か撮り一旦見てもらうことに。
ゆうき「とりあえず、こんな感じに撮れたので一度見てください！」
あり「わかりました！」
あり「めっちゃいい感じですよー！社長どうですか？」
社長「おお！いいじゃないか！」
ゆうき「ありがとうございます！」
社長「こんな感じで引き続き頼むよ！」
ゆうき「わかりました！」
あり「うんうん！この感じでいろいろ撮ってほしいです！」
ゆうき「了解です！」
ゆうき自身も自分の写真に手応えを感じこれをベースに撮影を進めていこうと考え、ありと社長はいい感じの写真を見て手応えある表情を見せた。
ゆうき「そしたら、このままこれをベースに何パターンか撮り進めていきますね。」
あり「わかりました！お願ひします！」
そう会話をしつつ時間のあるかぎりゆうきは撮影を進め今までで一番いい写真を撮る努力をした。

撮影もいよいよ終盤に差し掛かりありもゆうきもラストスパートをかけていた。

ゆうき「いい感じいい感じ！あり、もうちょい右向けたりできる？」

あり「おっけー！こんな感じで良いかな？」

ゆうき「うんうん！大丈夫！じゃあ撮るよー！」

あり「ゆうきー！もうちょい角度つけてほしいかも！」

ゆうき「了解！」

撮影が進み終わりに近づいていくうちにお互い敬語はぬけて学生の頃のようにお互いをカバーし合い切磋琢磨して撮影をしていた。社長はそんな姿を見て感銘を受けていた。

ゆうき「そしたらもういい時間だからこれを最後にしようか」

あり「了解ー！」

ゆうき「じゃあ、何枚か撮っちゃうね！」

そうゆうきは言い最後に何枚か撮って今日の撮影の全ての過程を終えた。

ゆうき「それではこれで今日の撮影を終わります！最後に撮った写真を確認してもらってその中から一番いいものを選んでいただきレタッチの作業に入りたいと思います！」

あり「了解！社長どれがいいですかね？」

社長「んーそうだね。これとこれなんかいいんじゃないか？まあありが一番いいと思う写真を選んだらいいと思うよ。」

あり「確かにいいですね。わかりました、ありがとうございます。」

あり「じゃあ、社長が選んだ写真とここからここまでの写真で！」

ゆうき「わかった！そしたら選んだ写真たちのレタッチ作業に入るね。」

あり「うん！ありがとう！」

その後ゆうきはレタッチ作業に入り写真を完成させた。完成品をありと社長にもみせて確認してもらったのだった。

ゆうき「こちら完成品になります。ご確認お願いします！」

あり「めっちゃいい！ゆうきありがとう！」

社長「うん！これはすごいいいね！ゆうきさんありがとう！」

ゆうき「こちらこそこんな機会を与えてもらってありがとうございました！」

ありも社長も納得のいく一枚があったと言うことで今回の撮影はうまくいったのだった。

帰り際、ゆうきは社長に呼ばれた。

社長「ゆうきさん、今回の撮影ありがとうね！ありとの撮影を見て私は感銘を受けた、ゆうきさんならありを最大限に引き出してくれると思ったよ。そこでなんだけどゆうきさんをお願いしたいことがあるんだ。来年ありの写真集を出すプロジェクトがあるんだけどそのカメラマンをゆうきさんに是非お願いしたいんだけどいいかな？」

ゆうき「こちらこそこんな素敵な機会をいただきありがとうございます。ほんとですか！？私で良ければ是非そのカメラマンつとめさせていただきます！」

社長「ありがとう！そしたら詳細はまた今度連絡するからよろしくね！」

ゆうき「はい！ありがとうございます！」

ありは社長とゆうきの話を聞いて涙ぐんでいた。

あり「ゆうき、やっただね。」

ゆうき「うん、やっただよ。今まで諦めずに頑張ってきてよかった！全部ありのおかげだよ」

あり「そんなことないよ、私もゆうきのおかげで今まで頑張ってきたもん」

あり「次の写真集での撮影では最後まで笑って撮影しようね！今日はこんなサプライズあると思ってなかったから泣いちゃったけど」

ゆうき「うん、そうだね！最後まで笑って撮影しよう！約束！」

あり「うん！約束！」

お互いに今まで頑張ってきた事を振り返りながら「笑顔で撮影しよう」そう約束を交わした頑張り決意をした。

その日はそれを最後に社長やあり、事務所の方々と別れゆうきはスタジオを後にした。

第三章

時が経つのは早いもので気づけば撮影当日の3月9日になっていた。

撮影場所が決まってからも二人は忙しく多忙な日々を送っていたが互いに撮影の事を意識しながら仕事をこなしていたのだった。

そんな中、撮影当日の3月9日がやってきたのだ。

ありは誰よりも先に集合場所についていた。

あり「今日はいよいよ撮影の日か、こっちに帰ってくるのも5年ぶりか久しぶりだな。」

ありはそんな事を考えながら散歩を始めた。

あり「学校とかいつも行っていた場所はどうなってるのかな」

全部は時間がなくいけないと思ったありは学校だけ行ってみる事にした。

学校につき教室に入った。そして当時自分が座っていた席に座り外を眺めていた。

あり「こうして外を眺めるとあの頃のことがついこないだみたいに感じるな。懐かしいな。」

そんな事を考えながら想いに耽っていた。気づけば集合時間になっていてありは急いで学校を出て駅へ向かった。

ゆうきと社長は駅についていた。

ゆうき「社長、おはようございます！」

社長「ゆうきさん、おはよう！」

ゆうき「ありと一緒にじゃないんですか？」

社長「なんか、朝用事あるから駅で待ち合わせましようって昨日言われてね、一緒にじゃないだ。」

ゆうき「そうなんですな」

そんな会話をしているとありが駅に到着した。

あり「すみません、遅くなって…」

ゆうき「あり、どこ行ってたの？」

あり「ごめんちょっと先に着いたから散歩してた。」

ゆうき「なるほどね」

社長「みんなそろった事だし早速撮影を始めていこうか」

あり・ゆうき「はい！」

社長「私は遠くの方で見てるから撮影はゆうきさんに任せるね」

ゆうき「はい、わかりました！」

朝の挨拶を済ませて写真集の撮影が始まった。

ゆうき「じゃあ、撮影していこうか！どこから行く？」

あり「そうだね、どうしようかー？」

ゆうき「そしたら、海岸沿い、海、にしようか！」

あり「おっけー！いいね！」

ゆうき「じゃあ、海岸沿いからいこうか！」

あり「うん！」

そんな話をしながら二人は海岸沿いに向かった。二人は昔話に花を咲かせていた。

あり「この道を二人で通るのも5年ぶりだね。」

ゆうき「そうだね、あの頃はずっと一緒にいたもんね笑」

あり「実はさっきちょっと学校に行ってたんだ」

ゆうき「だから着くの遅かったんだね」

あり「うん」

ゆうき「どうだった？」

あり「いろいろ変わってたけど、あの頃の懐かしい思い出が蘇って感慨深くなったよ」

ゆうき「そっか、私もなるのかな笑」

学校の話をしてながら向かってるとあっという間に海岸沿いについた。

ゆうき「ここは5年たった今でも変わってないんだね」

あり「本当だね、あの頃はよくここでいろんな話したっけ笑」

ゆうき「うん、したね笑。好きな人の話とか昨日見たテレビの事とか将来のこととか。沢山。」

そんな昔のたあいな話をしながら写真を撮り進めた。

ゆうき「じゃあ、撮っていっちゃうね！」

あり「うん！わかった！」

ゆうき「おっけー！」

いつもの慣れ親しんだ場所ってのも合ってたか二人息の合った写真が沢山撮れた。

ゆうき「ここでも沢山撮ったしどんどん撮影進めていこうか！」

あり「うんうん！そうしよう！」

二人はそのまま砂浜の方まで歩いていき砂浜での撮影を再開した。時間ももう残すところ3時間をきったところだった。

ゆうき「時間ももう少ないからどんどん撮っていこう」

あり「了解！」

ゆうきはそうやって力のある限り一生懸命沢山写真を撮った。

それもそのはずでこの砂浜はゆうきとありが小さい頃初めて出会った場所でありよく遊んだ場所だからだ。だからこの場所での撮影にかかる思いは人一倍あった。

ゆうき「ねえ、ありはこの場所覚えてる？」

あり「もちろん、覚えてるよ。私たちが初めて出会った場所でしょ。あれからもう10年以上経つんだね。」

ゆうき「うん、そうだね。なんだかこうしてみるといろいろあったね。」

あり「あったね…。遊んだり、喧嘩したり、恋話したり、沢山ね…。」

昔の話を交えながら時間のあるかぎり砂浜での撮影を進めていく。

ゆうき「じゃあ撮っていくね！もうちょいこっち向いて欲しい！」

あり「はい！」

ゆうき「おっけー！いい感じ！」

ゆうき「次は海バックにして撮ろうか」

あり「了解！」

あり「ゆうき、こういう感じも撮って欲しい！」

ゆうき「わかった！」

ありとゆうきはいつの間にかお互いに意見を出し合いながら撮影をしていた。
ゆうき「今日もあっという間だったね。なんかいろいろ昔の事思い出しながら撮ってたや。」
あり「あっという間だね。うん、私も昔の事思い出してた…」
ゆうき「5年ぶりともなるとやっぱりいろんなことが懐かしく蘇ってくるよね笑」
あり「そうだね笑」
そんな話をしながら何枚か撮り終え写真集の撮影は終わった。

社長「今日は一日お疲れ様。二人ともよかったよ！」
あり「本当ですか！？満点ですか？」
ゆうき「お疲れ様でした。こちらこそ一日ありがとうございました！」
社長「うん！ありは満点だったよ！」
社長「ゆうきさんもありを満点まで引き出してくれてありがとう！」
あり「やったー！」
ゆうき「いえいえ！カメラマンとして一人の親友として当然の事をしただけです。」
社長「いや、それを当たり前に出ることが素晴らしいんだよ。だから自信を持っていいんだよ！」
ゆうき「ありがとうございます！」
社長「そしたら、これで写真集の撮影は以上になります。また厳選してレタッチして書籍にしてって時間かかるけどとりあえず撮影自体はクランクアップなので皆さんお疲れ様でした！」
あり・ゆうき「はい！お疲れ様でした！」
あり「社長、私ちょっとゆうきと話してから帰るので先に事務所戻っててくださいー！」
社長「うん、わかったよ。気をつけて戻ってくるんだよ」
あり「はい！」
そう言って社長は駅を後にした。
あり「ゆうき、今日は一日ありがとね」
ゆうき「こっちこそありがとだよ。」
ゆうき「こうして小さい頃からの夢をありと叶えることができ嬉しかった！」
あり「うん！私もゆうきと夢を叶えられてよかった！」
ゆうき「なんかまたこうやってありと写真が撮れて話せる日が来るなんてね。」
あり「そうだね、あの別れの日にした約束を守れた事が私は一番嬉しいよ！」
あり「またこれからも一緒に頑張ろうね！」
ゆうき「うん！頑張ろう！」
あり「ゆうきは私だけのカメラマンでいてね！笑」
ゆうき「もちろん！笑」
最後は二人冗談を交えながら笑顔で終わることができた。
そして二人で帰路に着いたのであった。

それから数ヶ月が経ち厳選、レタッチも終わりやっと写真集の書籍が出来上がった。
そしていよいよ発売される日がやってきた。発売初日から沢山売れ完売になる程のものとなった。
ありの写真集はその月の女優、タレントの写真集の人気ランキングで堂々の1位を獲得した。
ゆうきもよりたくさんの案件をいただくようになり売れっ子カメラマンになっていた。
そんな二人は今でも切磋琢磨して活動をしている。